

MACF礼拝説教要旨

2023年1月29日

詩編23から

1【賛歌。ダビデの詩。】

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。

2主はわたしを青草の原に休ませ

憩いの水のほとりに伴い

3魂を生き返らせてくださる。

主は御名にふさわしく

わたしを正しい道に導かれる。

4死の陰の谷を行くときも

わたしは災いを恐れない。

あなたがわたしと共にいてくださる。

あなたの鞭、あなたの杖

それがわたしを力づける。

5わたしを苦しめる者を前にしても

あなたはわたしに食卓を整えてくださる。

わたしの頭に香油を注ぎ

わたしの杯を溢れさせてくださる。

6命のある限り

恵みと慈しみはいつもわたしを追う。

主の家にわたしは帰り

生涯、そこにとどまるであろう。

有名な詩編23編。

ここでのメインテーマは「私達は羊であり

神は私達の羊飼いである」ということだと思います。

羊にもいろいろな種類があるのだと思いますが

私がオーストラリア留学時代に学校の裏庭にいた羊たちは

一応に「ちょっとどこか変」という感じでした。

そして私は、羊の特徴を学びました。

*羊は遠くで見るときれいだけれど、近くで見るととても汚れている

しかも、自分でそれをきれいにする事ができない。

*羊は本当は弱いのに、どこか突っ張っているところがある

*羊には主体性のかけらもない。

というもの。

つまり、羊は羊飼いがいなければ、どうすることもできなほど弱いのです。

羊の幸せのためには、絶対的に「善良な羊飼いに世話をして貰う必要がある」

ということ。

まあ、これが羊だけの話であればここまで読んで、「羊は愚かだ、可愛そうなやつだ。」

で終わるわけですが、聖書は羊の話を出しながら、これが人間、そのものだと言っているわけですね。人間も多くの場面で羊と似ているところがあるのです。

だからこそ羊飼いの存在は重要であり、羊の幸せは、羊飼いの資質にかかっていると言っても過言ではありません。

さて、詩編では「主」が羊飼いであり、主が休ませ、水辺に連れて行ってきて、生き返らせ、導き、ともにいてくださると続きます。

それが人間に対する神様の姿勢であり、それをうなづいて羊飼いを必要と認め、羊飼いについていくとき、人間の幸せを実感できるようになるというわけです。イエス様は「私は良い牧者である」と宣言され「羊のために命を捨てる」と宣言されました。そこには羊のための深刻なまでに重大な「愛」が込められています。愚かな羊を愛し、世話をし、養い、生かす羊飼いとしてイエス様は来られました。私達は、本気で「自らの羊性」に気づく必要があると思います。羊飼いにケアながら生きなければ破滅的な状況になることも、真剣に受け取る必要があります。

詩篇23のわかりにくい箇所に、「鞭」と「杖」がありますね。この鞭は羊を打つためのものではなく、羊の敵を打つためのもの、杖は羊が穴に落ちたら拾い上げるため、また、牧舎にもどって来たとき、羊の存在を確認するための杖です。

羊飼いにケアされてこそ羊は「一人で生きる以上の喜びを経験」できるのです。

今朝、詩編23篇を何度か声に出して読んでみて、「主は、本当に私の羊飼いだ」と確信できたなら良いですね。

新改訳聖書の詩編23も載せておきます。

詩篇 23篇

ダビデの賛歌

1 主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。

2 主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。

3 主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。

4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、私の頭に油をそそいでくださいます。私の杯は、あふれています。

6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

祝福がありますように。

@@@

MACF礼拝映像はこちらです

<https://youtu.be/0xEYFsTugAo>